

宗教心理学研究会ニューズレター

第1号 2004.1.9

宗教心理学研究会 *Society for the study of psychology of religion*

目次

第1回研究発表会報告	1
宗教心理学研究会のワークショップに参加して	恩田 彰 7
ワークショップの感想と研究会への期待	金児曉嗣 8
宗教心理学研究会の発足にことよせて	作道信介 9
ワークショップの感想および宗教心理学研究会への要望	杉山幸子 9
ワークショップの感想および宗教心理学研究会への要望	高橋正実 10
ワークショップの感想および宗教心理学研究会への要望	仲野好重 11
焦らずゆっくり着実に	西脇 良 12
宗教心理学での、科学的な論文とは如何なるものか	林 知幸 14
宗教心理学研究会ワークショップに参加して	堀江宗正 15
ワークショップに参加して	森 真弓 16
事務局からのお知らせ	17

第1回研究発表会報告

2003年9月15日(月)、日本心理学会第67回大会ワークショップにおいて、宗教心理学研究会第1回研究発表会が行われた。当日は、大会最終日の最後のスケジュールではあったが、多くの方々が集い、研究発表会は開始された。

まず司会の高木秀明先生より、今回の研究発表会の企画者、話題提供者、指定討論者の紹介があった。その後、発足した宗教心理学研究会の紹介

を松島が行い、杉山幸子先生による話題提供から研究発表会は開始された。

話題提供の報告については、発表要旨が、研究会ホームページ[http://www.geocities.jp/psychology_of_religion_japan/]にも記載されており、論文が刊行されていることもありますので、当日の発表概要を報告したいと思います。詳細は、発表要旨、論文をご参照下さい。

[話題提供]

1. 日本における宗教心理学の歴史と現状: 杉山幸子先生

杉山幸子先生からの話題提供は、心理学評論に掲載された論文を基に行われた。論文を作成する経緯として、自分は社会心理学を専門とし、対象として宗教および新宗教を研究する過程で、今自分が行っている研究はどのような位置に布置しているのかを検討するために行ったことを述べた。過去の宗教心理学的研究を調べていく中で、思っていた以上に日本においても宗教心理学的研究が存在していて、その中でも、「心理学的宗教心理学」と「宗教学的宗教心理学」の2つの宗教心理学が存在していることが明らかになってきた。しかし、今回の発表では、時間の関係上、「心理学的宗教心理学」に絞って報告する。

「心理学的宗教心理学」の研究史を、明治・大正期の宗教心理学、昭和期(戦前)の宗教心理学、戦後～現在の宗教心理学に分け、それぞれの特徴を示した。

明治・大正期の宗教心理学は、アメリカの宗教心理学の影響を大きく受けたことから質問紙調査での研究が多くみられた。また、この時期は、非常に勢いのあった時期でもあった。研究対象としては、[青年・成人]と[児童]が多くみられた。特に、児童を対象とする研究は、当時のアメリカの宗教心理学の影響を大きく受けていた現れでもあった。さらに入谷(1920)の禅の研究は、その当時、非常に斬新な研究であり、その後の禅の心理学的研究の先駆として位置づけられている。

昭和期(戦前)の宗教心理学は、明治・大正期の宗教心理学のような勢いがみられなくなった時期であった。この時期は、アメリカの宗教心理学が衰退し、アメリカの宗教心理学を輸入する形で研究が行われていたことから、本場の衰退に合わせて、日本の宗教心理学も衰退していった。また、宗教心理学を行っていた研究者も、大学院生や学生が中心であったことも影響していると思われる。その中でも重要な研究として挙げられるのは、今田(1933,1947)の『宗教心理学』であり、これはそれまでの日本の宗

教心理学の集大成的な著作であった。また、関(1944)が行った児童の宗教心理の研究では、質問紙ではなく参与観察による膨大な資料に基づく貴重な研究であった。さらに、松宮(1933)が行った「キリスト教に対する態度」の研究では、初めて宗教心理学の中で「態度」という概念を提出したことから、その後の宗教心理学的研究に大きな影響を与えた。今田の『宗教心理学』が発刊された後、宗教心理学という言葉がほとんど使われなくなった。これは、その後、社会心理学が発展し、その中で宗教を扱う流れが形成されていったことがその理由と思われる。その社会心理学への流れを作ったのが、この松宮の研究であると推測される。

戦後～現在の宗教心理学は、細かく分類すると他に存在する分野もあると思われるが、「青年の宗教意識」、「宗教的態度」、「パーソナリティ」、「回心(新宗教)」、「宗教的発達」の5つの分野に分類されると思われる。「青年の宗教意識」は、従来の宗教心理学を引き継いだ内容のものであった。「宗教的態度」は、1950～1970年代にかけては、キリスト教に対する態度に関する研究が主であったが、近年では、金児(1997)を始めとする日本人の宗教性(民俗宗教性)を汲み取ろうとする研究であり、社会心理学の立場から活発に行われている。「パーソナリティ」は、投影法などを使い、宗教間や信者間での違いを明らかにしようとしている。また、シャーマニズムからユタのパーソナリティについて検討している。「回心(新宗教)」は、心理学的な区切り方ではなく、研究対象から分類している。これは心理学の立場から分類するのが難しかったので、このような分類をした。これは、ブリーフシステムによるカルト研究などが挙げられる。「宗教的発達」は、ほとんど存在していなのが現状であった。これらが日本における現在までの宗教心理学の流れとなっている。

2. 宗教的自然観に関する心理学的研究 - あらたな宗教性指標の模索 - : 西脇 良先生

今回の調査研究を行うにあたり、日本人の宗教意識は本当に低いのかどうかということと日本の宗教文化へ焦点を当てた。そこから、宗教文化の基底にふれる指標を模索し、宗教的自然観の研究へと

展開させていった。まず最初に宗教的自然観の概念構成を行うために、実証的研究(林,1994)、近接する研究領域(家永,1943;大西,1948)、宗教的情操論(小学校・中学校の学習指導要領)を参考にした。

これらの先行研究から、宗教的自然観の基本的枠組[宗教的価値対象(価値対象に対する認識・感情) 人間(自己の在り方の認識・感情)]を提示し、具体的な調査研究を行った。調査は、人々のもつ自然観の概要を分類・整理し、宗教的自然観の特徴を明らかにし、中学生および高校生に対する調査を実施し、発達の観点から検討することを目的とした。その結果、宗教的自然観は、大きく6つに分かれ、28コードに分類された。その内容は、[宗教的認識(5)、象徴的認識(4)、生命認識(1)、喚起感情(9)、宗教的体験(5)、神秘的体験(4)：括弧内はコード数]であった。特に、本発表では、宗教的体験に着目する。宗教的体験の下位コード[小ささ・無力さ、存在の不思議さ、存在の喜び、共生・一部・本来性、死生観]では、特に、若干の学年差、性差がみられ、学童期のより早い時期に体験したとの報告がみられることから、今後、さらに詳細な発達研究が必要であると考えられた。

今回の調査研究を通して得られたものとしては、宗教的自然観は、日本の宗教文化の中で生きる人々の宗教性を捉えていくための、根本的かつ重要な一指標ではないかという点である。回答者自体の記述頻度は低かったが、これまであまり注目されてこなかった子どもの宗教性が浮き彫りにされたのではないかと考えている。また、宗教的自然観を提示することにより、宗教心理研究を進めることで、日本の宗教文化に生きる人々の宗教意識およびその発達をある程度まで説明できるのではないかと考えている。今後の課題としては、宗教的自然観の概念の精緻化、その形成プロセスの解明、さらにこれが日本独自のものなのかを検討することも含めて文化間の比較を行いたいと考えている。

3. あるプロテスタント(ホーリネス系)教会における日本人クリスチャンの宗教性発達過程モデルの構成：松島公望

本研究は、Glock(1962)およびGlock & Stark(196

5)と杉山(1993)における「宗教性(信念、行動、体験、知識、共同体、効果(報酬・責任)」と作道(1983,1984 a,b,1986a,b)における「宗教的社会化」に基づき、7人の日本人クリスチャン(神学生)を対象に縦断的に面接調査を行い、そこから得られた資料を基に宗教性発達過程モデルを構成することを目的とした。

宗教性発達過程モデルを構成するにあたり、以下の手順で分析を行った。

[(1)録音したテープから逐語録の作成、(2)逐語録個人分析表の作成、(3)個人分析表をカード分類時系列に並べ替え、(4)個人史(事例の概要)の作成 事例の分析、(5)宗教的社会化に基づく宗教性発達過程モデルの再構成 各段階の設定、(6)個人史から捉えられる(各事例における)宗教性発達過程モデルの構成、(7)7人のモデルにおける各段階(局面)ごとの分類・整理、(8)日本人クリスチャンにおける宗教性発達過程モデルの構成]

個人史の流れ(事例の概要)は、1.教会に関わる契機 2.その後の教会生活[(1)回心体験(救いの体験)の契機、(2)救いの体験～洗礼、(3)洗礼後の教会生活、(4)献身に関するエピソード、(5)高次の回心体験(きよめの体験)の契機、(6)きよめの体験] 3.7神学校での生活[(1)神学校での生活、(2)卒業1週間前のエピソード] 4.卒業後の生活(牧師としての生活)であった。

これらの個人史から各事例における宗教性発達過程モデルを構成した。構成するにあたり、(1)前救い段階、(2)救い段階、(3)きよめ段階の3段階を設定した。前救い段階とは、キリスト教との出会い(現実定義との接触)から回心体験(救いの体験)に至るまでである。救い段階とは、救いの体験後から、現実定義の内在化を経て、高次の宗教体験(きよめの体験)に至るまでである。きよめ段階とは、きよめの体験を経て、深いキリスト教理解をし、宗教性が深まり、宗教性に基づく態度や実践へと結びついていくものである。各事例のエピソードを各局面ごとに分類・整理し、共通した内容をまとめた結果、日本人クリスチャンにおける宗教性発達過程モデルを構成した。

本研究では、モデル構成を通して、様々な「もの

の見方」を提示した。今後、さらにモデルを検討し、「宗教性の様々な側面や新たな側面」を見いだしていきたいと考えている。

【指定討論】

1. 作道信介先生からの指定討論

杉山さんの宗教心理学の歴史の概観は、宗教心理学的研究がどのような方向づけにあるのかを理解するのに非常にわかりやすいものであった。また、今回の話題提供者の発表を聞いて、普遍性、一般性の問題で、たとえば今回の松島さんの研究で、モデルを構成したが、対象としたキリスト教会では望ましいモデルではあるが、他の領域との関連でモデルを捉えるとどのように扱っていたらよいかは難しいことである。

フィールドワークを行うことによって、質問紙では捉えることのできない現象を捉えることができる。たとえばある人と二日間一緒にいれば質問紙ではみることができない事柄がよくみえてくるのである。宗教的社会化という概念があるが、宗教以外やその人が宗教的だと思われない場面も、その人にとって重要であることも忘れてはならない。

自分自身がフィールドワークを行う際、特に「ある場面への着目」が重要であると考え。それは、観察やインタビューといった多様な質的方法、宗教体験や宗教的社会化などといった多様な関心によって捉えられる。そして、これらの方法、関心はどんなことでも良いのである。それ以上に、調査している相手とどれだけいられるのか、研究方法論よりもその姿勢が重要なのである。

自分が行った「羊と羊飼い」調査がある。この研究は、牧師YTの独立伝道によって始められたSキリスト教会を調査対象としている。この調査を通して、調査対象者との「やりとりの場面」に着目して、特定の時と場所と人の中で生起する発言やふるまいの重要性を捉えることができるのである。フィールドワーク(観察)を通して、場面への着目について次のようにまとめられる。まず、現実定義とは、場面へ着目することによって、様々な現実定義がみえてきて、書かれた教義ではなくやりとりの中で生成されてくるものであると捉えることができるのである。また、知

識の生成や分配が行われるとは、関係の中で「知っている」状態になっていくことである。そして、ある集団の関係の中で共有される知識を知らない場合には、無知ではなくて「幼い信仰」ととられるのである。指導層に対するサンクションについては、組織の発展段階との関連で示すことができると思われる。

最後に、今回の発表全体を通して、「日本固有の」という言葉が出てきていたが、日本固有のものと同時に、日本固有のものが、全体の、世界にある沢山の文化からみれば“one of them”であることも忘れてはならないのである。

2. 金児曉嗣先生からの指定討論

まず今回のワークショップのテーマである『実証的な宗教心理学的研究の展開 - その歴史と現状 -』であるが、その副題については、今回の杉山先生の発表(論文)から多くの事柄を学ぶことができ、非常に評価できる内容であった。問題は、主題である『実証的な宗教心理学的研究の展開』である。この『実証的な宗教心理学』というタームは、いろいろな意味にとることができる。つまり、「実証的」というのは、対象の問題なのか、方法の問題なのか、といった問題である。対象においてもいろいろなレベルがあるので、厳密に言えば、実証的な方法をとれない場合も出てくる。方法の問題に深く関連する事柄であるが、この「実証性とは一体何か」という問題が気になった。

もう一つは、「宗教心理学とは一体何であろう」ということである。学問の領域は、基礎学問を始めとして体系的に存在しているものであるが、それぞれの学問領域で提出される知見についてどの領域が正しい正しくないといったものではなく、相互補完的な関係にあって、我々はまずそれを踏まえておかなければならない。同じことが心理学でも言えることで、それぞれのパースペクティブが存在している。それは、ミクロな視点からいえば、神経生理学的なパースペクティブ、生物学的(進化論的)なパースペクティブと続き、その上をいえば、段々と方法論的に荒くなっていき、科学性が雑になっていく。それは、認知的、人間学的、精神分析学的パースペクティブなど

が存在している。科学としての厳密性からいえば、神経生理学なパースペクティブなどは科学性が強い。我々、社会心理学を研究する人間にすれば、そのような知見も参考にしていかなければならない。宗教心理学という学問が、その心理学の多様なパースペクティブの基に研究される必要がこれからあるのではないかと。それは、そういう方向でないと思われ、社会における認知が得られないと思われる。

「実証性」というのは、それぞれのパースペクティブにおいて異なるはずである。全てのパースペクティブで均一の(同じような)実証性を求めることは不可能である。結論的にいえば、ここでは、「実証的な」という言葉は不要ではないかと思われる。自然科学的な方法論をとらない人達にとっては少し抵抗があるように思われる。

次に、宗教心理学が停滞した理由として、W.Jamesがドイツの友人への手紙の中で、自分の著作『宗教的経験の諸相』は、「信仰を持つ人にとっては生物学的すぎる」、しかし、「生物学者にとっては宗教的すぎる」といったことを言っている。宗教心理学的研究を行っている我々にとっても同じことがいえる。他の領域の研究者にとっては、内輪のことをやっていると思われる。また、宗教家にとっては、宗教ではなくなってしまっている、宗教の生き生きしたものがなくなっていると思われる。そのような意味では、宗教心理学は非常に難しい立場に置かれている。これは、自らが留学していたときに、Batson, C.Dも同様なことを言っていた。宗教家にとってあまり意味をなさないものになってしまうのは、全てを心理学的なタームに還元してしまおうということにあるのだが、今後は、宗教家にもそのことを理解してもらわなければならない。今後、相互理解が必要になってくる。心理学者にとっては、宗教心理学を行う研究者の大部分の人は、何らかの形で宗教界にコミットしている場合が多いと考えられている。したがって、自身の価値観がフリーな立場でない場合が多いので、できる限りフリーな立場で研究するという姿勢を持つ必要がある。心理学界で理解してもらうためには、できる限り一般的な用語を使って説明していくことが重要になってくる。

松島さんの研究発表において、たとえば回心体験は態度変容、現実定義の接触は単純接触効果といったように、宗教現象を一般の心理学上の説明原理でもって説明することが求められているのではないかと。西脇さんの研究は発表では、宗教的自然観は非常に重要な問題であり、自分の研究と重ねると、「オカゲとタリ」のオカゲの部分に相当すると思われる。このことを文化間で比較することであるが、和辻哲郎らが言ったことであるが、「東洋、日本の宗教は森の宗教であり、ユダヤ・キリスト教、イスラム教は砂漠の宗教である」と言っている。我々にとっては、自然はありがたいものであり、自然に融合するという観念があるが、砂漠の宗教の人にとっては、砂漠の中にいれば死んでしまうので、砂漠を変えていかなければならないために科学が発達していくし、そのように自然を捉えている。そのことを今後どのように考慮していくのかが問われていくと思われる。

指定討論者の作道先生が参与観察が自分のスタンスであると言っていたが、これは非常に重要なことであり、これは冒頭で言った「実証性」に深く関わってくる。科学は臆測ではなくて、根拠がしっかりしていなければいけない。体系的に獲得された知識の集合体が科学と定義できると思われるが、科学と実証というところの別の次元である。実証とは根拠がしっかりしていなければいけない。実証を標榜する立場には、大きく2つしか存在しないと思われる。1つは、統計学的な分析を使う立場(客観的・因果的・実験的理解)であり、もう1つは、現象学的に物事を明らかにしていく立場(主観的・共感的理解)である。前者の方法を扱っているのが心理学であり、後者の方法を扱っているのが宗教学である。今後、求められているのは、それぞれの立場がどのように歩み寄っていくことができるのかということである。そういうことができたのなら、宗教心理学が心理学的に大きな位置を占めるのではないかとと思われる。

[質疑応答]

司会の高木先生が今回の話題提供、指定討論で発表された内容をまとめた後に、質疑応答が行わ

れた。高木先生より時間の都合上、個々の研究発表についてふれるのではなく、金児先生が示唆された宗教心理学全般の問題について討論を行ってはどうかとの提案があり、質疑応答が始まった。

まず、東洋大学の恩田彰先生から、今回の研究発表会について感じたことを述べられた。自分自身が行ってきた禅の研究について触れられた。さらにトランスパーソナル心理学やユングの深層心理から行動と意識の問題が出てきて、これは心理学の根本問題であることを示唆した。また、「臨床の知」という立場から宗教体験を体験することにより、そのことに囚われずに、宗教を理解していくことの重要性を示唆した。

続いて、フェリス女学院大学の井上恵美子先生から、同様に今回の研究発表会について感じたことを述べられた。心理学の立場から個人の中の信仰を捉えるならば、「人格心理学」、「学習理論」、「人間性心理学」という3つの面から扱うことができるのではないかと。そうした今回の発表とは異なる科学的方法がもっとあるのではないかと示唆された。

ノースイースタン大学の高橋正実先生から、最近、アメリカにおいて宗教心理学(Religious Psychology)に対して、宗教という言葉に対して欧米の中ではいろいろあることがあるので悪いニュアンスがあり、最近、新しい団体や文献が作られるときは、Religionの横に、横棒でSpiritualityが入り[Religion -Spirituality-]、Spiritualityとなると、自然信仰みたいなものも入ってくる。一般の宗教を持っていない日本人にとっては、自然信仰は宗教ではないとの意見もあるだろうが、既存の宗教であるキリスト教、仏教以外の自然崇拜などを研究するときにはSpirituality(霊性、精神性)という言葉も入れておけば、外部の人も入りやすいし、また、宗教をもっていない人達の研究も行うことができるのではないかと思うのである。

甲南女子大学の藤島寛先生からは、「研究を行う際に、構成概念妥当性を検討するために、具体的にどのようなモデルや理論を想定しているのか」との質問があった。これに対して、杉山先生は、「今までの研究で論じていないのは、自分の中でも整理されていない、できていないことがある。学会発

表をしたり、論文を書いたりする際に、受け入れられる形でまとめて発表したいという思いと、宗教対象に密着した研究をしたいという思いの間で揺れ動いていて、論文を書く際に、キーワードを書くが、キーワードの選定でいつも悩んでいる。また、アメリカの心理学会の中でも宗教心理学には理論がないと言われるが、私たちにもそのような弱さがあるのではないかと感じている。」と回答した。さらに金児先生から「向宗教性という概念のときは、宗教的な行動レベルで、宗教に関するものにどれだけ関心を示すかについて検討すればよいと思われる。しかし、もっと大事なことは、Glockたちが言っている[宗教的効果]である。これは宗教が及ぼす世俗的效果のことであり、宗教的信仰が宗教以外の側面にどのような効果を及ぼしているかである。この宗教的効果から考えると関連する概念は沢山存在する。たとえば、研究者が仮説モデルを作るときに、宗教的信仰のある側面が強くなると、self controlが強くなるということを仮定すれば、self controlを通して、心理学的に論じることができるのではないかと。同様に、精神的健康との関連やV.Franklの生きる意味との関連などからも検討することは可能ではないかと思われる。」と回答された。

[閉会]

金児先生からの回答を持って、研究発表会は閉会した。質疑応答が盛り上がっていたので、ここで閉会するのは非常に残念な感もあったが、時間が過ぎていたこともあり、やむなく閉会した。当日の出席者は把握している人数としては34人であったが、それ以上の出席があったとの話も聞いている。企画者たちの間では、人が集まるのかとの不安があったが、その不安が吹き飛ばすほどの盛況ぶりであったと思う。

研究発表会終了後、宗教心理学研究会の発足を兼ねて懇親会が行われ、10人のメンバーが会に集った。懇親会では、普段、自分たちが学会で宗教心理学をテーマに語り合うということがほとんどなかったからか(これは私だけでしょうか…)、懇親会も研究発表会同様に非常に盛況であった。最後には、「来年は、関西大学で再会しましょう」を合い言

葉に、懇親会も無事に閉会した。

(文責:松島公望)

今回の研究報告は、松島が研究発表会の内容をまとめ直したのになっております。そのために、発表者の意図とは異なる記述があるかもしれませんが、その場合はお手数ですが、松島[kobo@yf6.so-net.ne.jp]までご連絡下さい。

宗教心理学研究会のワークショップに参加して

恩田 彰(東洋大学)

このワークショップに参加して、自分の研究してきた事を思い出し、また各発表を聞き、宗教心理学研究会を立ち上げられることを知り、感動した。皆さんのそれぞれの発表がユニークで興味深かったことである。杉山幸子さんの「日本における宗教心理学の歴史と現状」は大変参考になった。

私と宗教心理学とは、かかわりがある。私は寺院に育ったが、将来印度哲学を専攻して僧侶になるか、宗教学をやるかと思っていた。しかし旧制の東京高等学校で一年の時心理学を学び、これこそ人間研究の基礎学であると自覚し、心理学を専攻したいと思い、とくに宗教心理学を探究したいと思っていた。ところが東大文学部心理学科に進みゲスタルト心理学を学んだ。卒業して労働科学研究所に1年、東京学芸大学付属中学校の社会科の教師を5年つとめ、東洋大学に心理学の助教授として就職した。昭和30年頃ガードナー・マーフィーの創造性のコンセプトに接し、これを専攻するようになった。そして昭和36、39年度に東洋大学学長の佐久間鼎教授を班長とする文学部総合研究「禅の医学的心理学的研究」に参加し、禅の心理学を初めて探究し、「禅と創造性」の一連の研究を発表してきた。

佐久間鼎教授は1948年「神秘的体験の科学」をまとめたが、その中で禅における黙照体験すなわち禅定について、次のように述べている。「人間の脳皮質の電位変化が、比較的刺戟から脱した条件下で、眼を閉じて心的ならび体的に平静な状態にあって、しかも眠りに入っていない場合に基準的な脳波のアルファ波を提供することを想起して、黙照体験の心理状態に類するこの場合の底流的生

理過程の定常的な姿を示唆するにとどめよう」と述べて、座禅が脳波によって、またその生理的過程が客観的に明らかにされることを予見している。後に精神医学の平井富雄博士は、佐久間のこの予見に大きな影響を受けて、座禅の脳波的研究を行い、座禅によって脳波が変化すること、すなわち意識が変わることを実証した。その結果は平井の学位論文「座禅の脳波的研究」としてまとめられている。

こうした状況において禅の総合的科学研究、1961、1962年の文部省科学研究費による「禅の医学的心理学的研究」が佐久間を代表として行われ、これがわが国のみならず、世界で初めての禅の本格的科学的統合研究であった。

この研究が基準となる創造性や心理療法の研究の動向は、東洋の仏教の智慧に求められ、気づきや直観や想像力を自ら打ち出す瞑想研究が行われ、西洋の研究者の関心を集めているが、早稲田大学名誉教授の春木豊教授を中心として瞑想の国際的な総合研究が活発に行われている。

この研究会に期待したいがことは、私たちのように心理学のアプローチに基づく宗教心理学者と共に宗教学を基礎とする宗教心理学者が協力し合うと共に、社会学、文化人類学、宗教史学、宗教現象学、神学、仏教学、哲学、教育学等の諸学を専攻する研究者に参加していただいて、やがて研究会を学会に移行させていく努力が必要ではないか。その前提として、宗教心理学のテキストの作成ならびに「宗教心理学辞典」をつくり出してはどうか。これには時間と労力を要するかもしれないが、皆さんに期待したい。私が長年日本応用心理学会の常任運

営委員をつとめたが、その間多くの学会がこの学会から巣立っていった。私の気持ちでいえば残ったのが宗教心理学ということだ。この学会で企画・司会または発表したテーマは、禅とカウンセリング(1963年)、創造性に関する研究-創造過程と禅の悟り並

びにESPとの関係(1964年)、現代における宗教の問題と心理学(1976年)、宗教と癒し-禅の立場から(1992年)、その一部しか紹介できないが、私は積極的に参加してきた。

ワークショップの感想と研究会への期待

金児曉嗣(大阪市立大学)

今回の「宗教心理学研究会」の発足は、松島公望さんの並々ならぬ熱意があって実現したものです。氏のご尽力に心から敬意を表したいと思います。また、この熱意に呼応されてHPを立ち上げ、参加を呼びかけてくださった西脇良さん、ワークショップの司会を担当された高木秀明先生はじめ発表者の方々にも心から御礼申し上げたいと存じます。当日は、ごちんまりした教室がほぼ満席の盛況となり、制限時間に達してもまだ議論したらぬ余韻を残して散会となりました。宗教心理学に対して関心を持っておられる人が日本心理学会の会員の中に少なからずいらっしゃることを知ることもでき、大変嬉しくまた心強く思ったことでした。また、お若いときからこの分野に関心を持ってこられた恩田彰先生がこのワークショップに姿を見せられ、貴重なご意見を拝聴できましたのも望外の喜びでありました。

今後、多くの会員を募っていくことが望まれます。その際、高橋さん(Northeastern大学)も言われたことですが、“宗教アレルギー”を避けること、そのためにはわれわれの知見を広く心理学上の理論やチームに置き換えて説明する努力が必要です。この作業は「言うは易く行うは難し」で、一朝一夕にできるものではありませんが、宗教界に身を置いていない人たちも交えて、お互いの研究に対する忌憚のない意見を交換することによって可能となるはずで

す。そして、そうした地道な努力の積み重ねによっ

て、近い将来宗教心理学が、日本においても現代心理学の1つのブランチとして認知を得ることを期待しています。

そのためのひとつの方法は、現代の社会問題や社会が要請する諸課題に対して、宗教心理学の立場からメッセージを発信していくことだと思います。たとえば、死と生、脳死・臓器移植、高齢化社会、医療と介護、ペットロス、援助行動などなど、宗教心理学が関係すべき実際の問題はたくさんあります。もうひとつ大事なことは、相互の理解でありましょう。当日も指定討論の中で申し述べたことですが、とくに宗教といった学際的な研究領域については、そのアプローチは、統計的・実験的な方法から現象学的方法に至るまで、さまざまなやり方があります。それら多様な方法を相互に認め合い、それぞれ異なる立場からの知見に耳を傾け、自身の研究にそれをどう活かすかを考えることだと思います。このことは宗教心理学を超えて、現代の心理学や社会心理学、ひいては社会学、宗教学にも当てはまることでもあります。とりわけ宗教現象を探究する場合に忘れてはならないことだと思います。

ともあれ、若い人たちの熱意によってここまで来ることができました。近い将来、この宗教心理研究会の芽が、「宗教心理学会」として大輪の花を咲かせることを切望してやみません。微力ながら、私もお手伝いさせていただきたいと思っています。

宗教心理学研究会の発足にことよせて

作道信介(弘前大学)

私は最近20年前に調査をしたあるキリスト教の独立教会の再調査を始めている。強力な独立伝道者によって率いられたこの教会は戦時中の活動制限を経て、戦後成長したが、現在では高齢の信者が多くなっている。前回調査当時、青年部だった人たちが実質的に活動の中心になっていて、再調査に協力してくれている。これは教会の歴史を残そうという動機からでもあるし、それを今後の発展につなげることができればという思いもある。以前、彼らといっしょに遊んだり飲んだりしたときに、たぶん互いに感じたある不安定さがなくなって、つきあえるのはうれしい。

昨年は、昭和一桁世代、戦後指導者と出会って入信した女性をたずねた。実は、伝道における女性の役割は、教会にある日本の家父長制とかさなった表象のもと注目されていなかっただけである。彼女たちは戦後、夜の集会に親の反対をおしきって参加し、おしみなく奉仕をし、教会を支えてきた。できれば、来年(2004年)は当時の集会の場所を彼女たちとひとつひとつ歩いて、語りに耳をかたむけたい。また、この教会はいくつかの伝道所をもっている。それぞれは篤志信者の奉仕などによって建てられ

た。建物は戦後の青年たちが住み込み交流する場となり、実際、結ばれていったカップルも多い。この住み込み青年たちもたずねたい。そうすれば、信者のライフサイクル対応した教会の機能が明らかになる。この教会の戦後の発展のひとつのルートは結核療養所である。そこに務めることになる医学生や看護婦、患者さんたちが布教され、布教する人となっていく。入信は時代と歴史、よりローカルな社会状況を検討しないかぎり、理解することができない。

私は、「心理」がありそれが人を動かす、動かされた人を見ると共通の「心理」があるという近代的な枠組みが嫌いなのに、社会心理学を勉強してきたというアンビバレント立場にある。「心理」はもっとも最後に検討されるべき文脈と考えている。それまでに、やることはいくらもあるはずである。そこで、宗教「心理学」に何を期待するか、これから考えるつもりである。学問はもともと独学なのだから、それは各自でがんばるとして、宗教心理学研究会が、1年に1回、「宗教心理学に何を期待することができるか」を検討する具体的な研究実践が発表される場となることを期待する。そのような実践の総体が「宗教心理学」だと思うからである。

ワークショップの感想および宗教心理学研究会への要望

杉山幸子

今秋、ワークショップのために久しぶりに学会に参加してきました。学会に出るのは6年ぶり、日心となると10年前の沖縄以来です。実のところ、日心は特別の理由(地元で開催されるとか、ついでに沖縄観光ができるとか)がない限り行かないことにしていましたので、この先参加することはまずないだろうと思っていました。

私がずっと学会に行かなかったのは、発表が苦手

という理由もありますが、かつて学会に行って面白かったことがなかったからです。大学院生の頃は毎年地方の学会とたいい社会心理学会で発表していましたが、自分と近い研究をしている人と出会うことはまずなく、口頭発表のときは「ごたませ」の部屋に割り振られるのが常でしたので、ほとんど義務感からだけの発表でした。その後、金児先生やその学生さんたちと学会でお会いしたことがきっかけ

で、少し前向きな気持ちになったのですが、仙台から盛岡に引っ越したのを機に、すっかり足が遠のいてしまいました。

それが今年、ワークショップに参加させていただくことになったのは、ひとえに「言い出しっぺ」の松島さんの熱意に「負けた」からなのですが、出席しての第一の感想は「負けて良かった」です。予想したよりも遙かに大勢の方たちの前でお話するのはやはり緊張しましたが、考えてみますと、これまで自分の話に積極的に耳を傾けてくれる人たちの前で発表することはなかったわけで、これはなかなか新鮮な経験でした。また、それにも増して、自分以外の人たちの発表が自分の関心とつながっているということの嬉しさ！ もっとメジャーな研究をしている人たちにとってはこれが当たり前なのかと思うと、今更ながら妬ましいような気がしたほどです。ワークショップの後の打ち上げは残念ながら途中で失礼してしまいましたが、会場に向かう路上でのおしゃべり

もたいへん刺激的でした。

研究会の発足につきましては、本当に人が集まるのだろうかという懸念がありましたが、何と徐々に人数が増えている様子で、心強い限りです。私自身はうかつにもこういう会の必要性に思い至っていませんでしたが、実際に研究発表会に参加してみてもその大切さをしみじみと感じました。何といっても、(宗教学会などに行けばともかく)心理学の学会で他の人々と宗教研究について話し合うことなどなかなかないからです。こういう会が存在することで、研究している人が勇気づけられたり、また、新たに研究しようとする人を増やす効果はあなどれないのではないのでしょうか。

研究会の運営に関しましては、「事務局」を買って出て下さった松島さん、ウェブ担当の西脇さんにご負担をかけております。これから皆さんと一緒に研究会を盛り上げて、いつか成果を本の形にでもまとめられたらと願っています。

ワークショップの感想および宗教心理学研究会への要望

高橋正実(ノースイースタン大学)

私は、今回が日本心理学会初参加ということで、日本での宗教と心理学にかかわるこれまでの経緯をよく知りません。しかし、今回のワークショップは心理学の立場から宗教を捉えるという試みにおいてかなり画期的であったとの評判を聞きました。また、老若男女、実際に今回発表された研究に関わった方々等である聴衆が熱心に耳を傾け、討論に進んで参加していたのは若い企画者のこの分野に対する熱意が十分に伝わっていたということだとも思います。そこで、現在の欧米学会等の現状も見据えたいうえで、これからの日本宗教心理学研究会への希望を述べたいと思います。

ご承知の通り、同分野はW.ジェームスをはじめG.S.ホール、G.W.オルポート等の先駆者たちによって築き上げられて以来、APA(アメリカ心理学会)の小学会(Division 36、「心理学と宗教」)やGSA(全米高齢者学学会)の有志者会(Religion and Spirituality)の立ち上げ、International Journal for the Psy-

chology of Religion, Journal of Religious Gerontology等数々のジャーナルの発行など活気づいている分野です。そこでは、「宗教」という狭い意味での概念にとらわれず、常に心理学や他の社会科学との接点を模索しながらより大きな枠組みを作り上げていこうという努力がなされています。また、その研究内容は既成の宗教団体やカルト集団の民族誌的研究にとどまらず、宗教という概念そのものの定義づけ、宗教と様々な宗教に関わってくる成果変数([outcome variable]:たとえば健康の度合やwell-beingなど)の関わり等、基礎/応用の両分野において研究が行われています。近年、その中でも特にフェッター研究所やWHO等、公私の研究機関において盛んに進められているのが、宗教とスピリチュアリティについての研究です。「スピリチュアリティ」とカタカナで書くと最近では占いに似た意味で使われている一般書が多く出回っていることから、何やら怪しげなニュアンスがあります。また、私自身は、

その和訳である「精神性」「霊性」は何か本質を欠いているのではないかと思います。しかし、欧米の学会では、スピリチュアリティーはすでに深く浸透した概念となっています。例えば、前述のAPA小学会36部「心理学と宗教」の声明文には「宗教とスピリチュアリティーの様々な体系の研究・討論を目的とする」と書かれていますし、また、GSAの有志者会の正式名称は「宗教とスピリチュアリティー研究会」です。そしてこれらの学会では、スピリチュアリティーに関する研究発表が年々増えているのも事実です。

このように欧米学会ではすでに研究が進められている概念ですが、私は個人的に「スピリチュアリティー」とは茶の湯や武道の精神、または良い意味で

の「大和魂」など日本人の宗教心、心理とも密接な関係があると思います。それは今日7割弱の日本人が「信仰心がない」と言い切りながらも、仏閣や神殿になんらかの畏敬を感じ、正月や盆の行事を行っていることも無関係ではないでしょう。また、戦後の日本における宗教への違和感、靖国問題などに見られる近隣諸国との宗教観の相違等を考えるとき、単に既存の「宗教」という枠組みのなかで分析するのではなく「スピリチュアリティー」との関係視野に入れることで、宗教に対するより大局的な理論構築・研究ができるのではないかと思います。まだ日本では若いこの分野において、「スピリチュアリティー」ととりいれた議論はより包括的な宗教心理学論を展開する鍵となるのではないのでしょうか。

ワークショップの感想および宗教心理学研究会への要望

仲野好重(大手前大学)

今回の日本心理学会第67回大会において、全く予期しなかった出合いは、宗教心理学研究会主催のワークショップに参加したことでした。毎年のように学会には参加していますが、たいていは「面白くなかった」との印象を持って3日間が過ぎていきます。しかし今年は、プログラムの中に「宗教心理学」という文字を見つけて、何か懐かしい想いが込み上げてきました。

私は、今から20年程前、聖心女子大学で心理学を学んでおりましたが、学部3年生の時に松本滋先生の宗教心理学を履修し、感銘を受けたことを憶えています。その時に初めて宗教心理学と出会ったわけですが、学部を卒業してすぐに留学した米国・セントルイス大学はイエズス会が経営するカトリック大学でしたので、宗教学、神学、哲学等は得意中の得意という学問環境で私は20歳代のほとんどを過ごしました。アメリカの大学院における履修システムは非常に柔軟で、専門の発達心理学の研究をするかたわら、神学部のクラスにも参加して、道徳性発達や宗教におけるジェンダー発達などの学際的研究を行ったりもしました。それらの経験が、今

の自分自身の宗教心理学に対する基本的態度を作ったのだと思います。

話が脇にそれてしまいましたが、今回のワークショップに参加して、私は率直に「非常に乱暴な(失礼!)発表や荒削りな議論が多かった。しかし、これから何かが始まりそうな面白さを感じた集まりだった」と感じました。始まったばかりという初々しさ、とにかく色々な話題を集めてみたという欲張りさが、嫌味なく混ぜ合わさっていました。となると、これからの、特に第2回目のワークショップが見どころとなりますね。

この研究会の面白さは、多分、様々な分野・領域の研究者たちが、「宗教心理学」という共通軸を中心に、多岐にわたる議論を活発に交わしていくことだと思います。しかし、それと同時に、この研究会が外に開かれ、その成果を社会に何らかの形で還元していくことを期待しています。その為にも、今、宗教心理学を語る意味を、私たち一人一人が問い直して行かなくてはならない気がします。事務局の皆様は大変でいらっしやるとは思いますが、どうぞ宜しくお願いいたします。

焦らずゆっくり着実に

西脇 良(南山大学)

宗教心理学研究会の発足にあたり、発足準備のために労を惜しまなかった事務局の松島さんにまず御礼を申し上げたい。研究会の活動の輪が広がるにはしばらくの期間を要すると思われるが、何はともあれ最初の一步を踏み出せたことに大きな喜びを感じている。

本稿では、まず第1回研究発表会(ワークショップ)に参加しての感想を述べ、次いで、この研究会への抱負を、筆者として何ができるかという観点から述べてみたい。

1. ワークショップに参加して

今回のワークショップでは、話題提供者の1人として参加させていただき、"宗教的自然観に関する心理学的研究"と題した発表をおこなう機会をえた。発表内容は、日本の宗教文化の特質の1つとしての宗教的自然観に着目し、これが現代においても十分通用する宗教的指標であることを、生徒・学生約2000名を対象とした調査の結果をふまえつつ示そうとしたものであった。

研究テーマじたいは、自然と宗教との関わりという、宗教学では当然すぎるほどのテーマなのであるが、心理学領域での研究はまだまだ少ない。このような状況下では、まず探索的・概観的な研究が幾つか出てくる必要があると考えた。研究の雛型となったのは、欧米のRE(Religious Experience, 宗教的体験)研究ではすでに古典となっているHardy(1979)の研究¹⁾であった。対象となる宗教現象を多角的に概観するうえで有効な手法であると考え、このHardy研究にならって、自由記述データの分類整理を主とする調査研究をおこなった。調査では、生徒・学生の自然体験のなかに、宗教的な対自然認識とともに、宗教的な対自己認識("自分の存在のちっぽけさに気づいた"など)もみられることが示され、宗教性発達の観点から興味深い結果となった。また、宗教的認識を生み出す自然体験についても、体験時の状況("登下校中に","人間関係で

悩んでいるときに","など)や自然との接触頻度など、多くの要因が絡んでいることも示された。この探索的研究で見出された数多くの発見・疑問を手がかりとして、今後さらに仔細な研究へと深めていければと考えている。

ワークショップでは、時間的にもかなり限定された発表内容であったにもかかわらず、作道信介先生と金児曉嗣先生が丁寧に討論をして下さり、感謝の気持ちでいっぱいである。

作道先生は、日本の宗教文化における宗教的自然観を取り上げる際、仮に日本固有の宗教意識が見出されたとしても、それは世界からみて one of them であることの認識が必要ではないか、との指摘をくださった。"日本人の自然観"という視点はたしかに、たとえば小林(1997)が森林文化論におけるナショナリズムとして批判するように、適切な説明なしでは誤解を与えかねず、筆者のプレゼンテーション不足を反省している。宗教的自然観への筆者の関心はじつをいえば、キリスト教系学校における宗教教育に筆者が携わっている関係上生じてきたものであった。人間生活のどの側面に注目することが、(無宗教を表明する)学生らの内にも形成されている宗教性を、学生みずからが自覚することに繋がるのか、という教育上の疑問が、そもそもの発端であった。マスメディアを中心に若者文化をしばらく観察していたところ、"どうも自然のイメージや自然観が、若者の宗教性と関わりがあるようだ"との感触をえた。そこから、宗教教育上のアプローチはさておき、宗教的自然観そのものへ関心がうつり、研究テーマとした、という次第である。作道先生の今回の指摘は筆者にとって、今後の研究プレゼンテーションのあり方への貴重な示唆となり、深く感謝申し上げたい。

金児先生は、発表内容を、ご自身が展開されておられる、"オカゲとタタリ"としての日本人の宗教性論にも関連させながら、評価して下さった。じっさ

い、日本人の宗教性を考える場合に自然観への注目が不可欠であるとの指摘は、先生の著作でも強調されており(金児, 1997, 219-222頁), 因子分析的研究では宗教的自然観の項目を含めて調査がなされている。筆者の研究も、先生の先行研究に刺激された部分がおおい。また金児先生は、宗教心理学的研究のかかえる問題として、宗教に関わる心理現象の科学的説明をどこまで徹底させるのか、或いは実証的アプローチは不要なのか、という、大変重要な問題を提起された。この問題は、宗教心理学研究会の基本的立場に関わる問題でもある。今後、勉強会など議論の場をもうけていくことが必要であろう。筆者もぜひ勉強させていただければと考えている。

話題提供をされた他のお二人の発表にもふれておきたい。まず、杉山幸子さんは、明治期から現在に至るまでの宗教心理学的研究の流れを、豊富な資料的裏付けをもって概観された。これだけの大きかりなレビューには地道な資料収集が必要であり、そのことを考えただけでも頭の下がる思いである。さてまた、論文(杉山, 2001)でも今回の発表でもふれることの出来なかった情報も多かったことと推察される。そこで、かねがね考えていることであるが、個々の研究者がそれぞれ収集・蓄積した資料のうち基礎的資料と思われるものだけでも持ち寄って、一定の方法で整理した後に公開する、という作業は可能であろうか。筆者も一度整理を試みたことがあったが、時間的余裕がなく、そのままになっている。今回の素晴らしい発表を聞かせていただき、あらためて資料整理・公開の必要性を実感した次第である。

次に、松島公望さんは、ホーリネス系教会の神学生に対する調査に基づいて構成された、“成人クリスチャンにおける宗教性発達過程モデル”について発表された。モデル構成という仕事は、議論を活性化させてゆくために有効であり、今回の発表により、一層議論の輪が広がってゆくことが期待される。このモデルの特徴は、宗教性発達を促進させる要因として“聖書の言葉”を重視している点であり、そこが興味深い。(神学生にとっては)おそらく毎日

読み込んでいるであろう聖書箇所が、ときとして、宗教的体験の中核である“気づき体験”に直結するほどの強烈なインパクトをもって迫ってくる、ということであろう。たしかに、このような書物の読み方というのは、宗教に独特のものであるだろう(またそのような読み方が歴史的にも継承されてきたという点でも特異である)。このように考えると、宗教心理学的研究においても、聖書(ないしは教典・経典)を読む行為が宗教性発達に与える影響、というテーマでまた一つ、あらたな研究が生まれてもよい、と感じた次第である。

話題提供と指定討論の後に、フロアからの発言も活発になされた。各発言を拝聴しつつ、参加者それぞれが抱えている“宗教心理学”のイメージの多様性をあらためて実感した。とはいえ、杉山さんが研究史を辿ってくださった(心理学的宗教心理学のみであったにせよ)ので、“自分の研究関心はどのあたりに布置されるだろうか”と、ある程度イメージづくりも可能であったように思われる。

2. 研究会への抱負

今回のワークショップに参加して、“研究会がよいよ正式に動き出したな”という緊張感を味わうことができた。とくに、これまで文献上でしか存じ上げなかった先生方に実際にお会いすることができ、また多くの方々がこの研究会に関心と期待を寄せていることを知り、大変よい刺激をいただいている。これからの道のりは長いので、焦らずにゆっくりと発展させてゆければ、と思う。

研究会への抱負を述べるとすれば、資料情報センターとしての機能をこの研究会が果たすことができるように、何らかのお手伝いができれば、と考えている。先の、杉山さんの発表のところでもふれたが、これまで宗教心理学に関心を寄せる研究者は、個々ばらばらに資料収集に四苦八苦していたのではないかと思う。たしかに資料収集に苦労することも大切であるが、研究分野そのものの発展という見地からみた場合、もうすこし便利な状況があってもよいかもしれない。とくに今後の若手研究者の育成という観点から、資料面でも一定の寄与を果たすことは、研究会の活動目的にもなっていると思う。

そこで、たとえば、(1)会員各自が所有している文献目録を集めて公開する；(2)会員各自がレビューした調査研究を一定の形式で整理して集め、公開する；(3)とくに宗教性測定尺度などは、質問項目リストまで含めて集め、公開する、などの作業を行ってゆければと考える。このプロジェクトのため、たとえば会員のボランティアを募り、収集や公開の方法を話し合ったのち、期限を定めて少しずつでも公開してゆく、という形があり得るだろう。もしこのアイデアが会員の賛同をえるところとなれば、筆者も積極的に作業に参加してゆきたい。

そのほか、学術雑誌の紹介レビュー、新規出版物の紹介、共同研究の呼びかけ、宗教心理学Q & Aコーナー、などなど、情報交換の活動が活発になると大変よいと思う。

以上、宗教心理学研究会発足にあたり、第1回研究発表会(ワークショップ)および今後の抱負について述べてみた。期待するものが多い一方で、お

互いに多くの仕事をかかえての発足である。焦らずゆっくり着実に、進んでゆくこととしよう。

[注]

1) 一般の人々が書き送ってきた宗教的体験(新聞雑誌で紙上広告を出した)の事例3000例を、合計92からなるコード(視聴覚やESP、認知や情緒など)に分類整理した研究である。

[引用文献]

Hardy, A. 1979 The spiritual nature of man: A study of contemporary religious experience. Oxford: The Religious Experience Research Centre.

金児曉嗣 1997 日本人の宗教性 オカゲとタタリ
の社会心理学 新曜社

小林裕 1997 「森林文化論」とキリスト教
キリスト教図書出版社

杉山幸子 2001 日本における宗教心理学の歴史
と現状 心理学評論, 44, 307-327.

宗教心理学での、科学的な論文とは如何なるものか

林 知幸(徳島文理大学)

宗教心理学の分野で説得力のある論文を仕上げる為には、やはり、それなりの尺度が必要だ。尺度の設定で、個別事例的普遍性という論拠を持たせうだろう。その論拠が科学的と見做されるのは臨床心理学と同じである。ところが臨床心理学では事例の個別性を重視しつつ、事例研究法はかなりの実績を挙げている。宗教心理学ではどうなのか？

ところで、私は某企業の相談室を担当している。その仕事は、まさに「縁起の世界に生かされている」ことを知らされるものである。来談者と関わる姿勢を仏教から学びたいと考えているが、私の信心はまだ机上論の域に留まっている。このような私が、宗教心理学の分野での博士論文に行き詰まるのは当然のことだろう。今迄、二つの大学院で

『聖・俗概念』、『歎異抄』の修論を提出したにすぎない。苦慮しているところに研究会へのお誘いをいただいた。

去る9月の研究発表会では松島さんに興味をそそられた。追跡調査もさることながら、事例への取り組み方そのものについて語り合いたい。また、論文を拝読させていただきたいとも思う。そして尺度の設定に関しては諸先生方の文献を購入したいものだと考えている。

自分自身の信心をどのような尺度にすればいいのか。事例への尺度はどうか。未だに論文構成の壁が立ちはだかっている。その意味で、研究発表会において科学的な論文のモデルを示して下されば大変有難い。私も発表が出来るものを仕上げたい。

宗教心理学研究会ワークショップに参加して

堀江宗正(聖心女子大学)

今回、ワークショップに参加して感じたことには、一言では言い尽くせない複雑なものがある。

まずは喜びがある。日本で宗教心理学者と名乗る人がまとまって登場してきたということに対する喜びである。この文章を読むような人なら、とうに事情はご承知と思われるが、かつて宗教心理学ないし宗教への心理主義的アプローチ(心理学に限らない)は、宗教理論の中でも、中心的な位置を占めていた。だが、現代の経験的宗教研究においては還元主義が嫌われ、個別現象の精緻な記述が好まれる傾向があり、また同じく現代の宗教理論においては、言語論的展開以後、心理主義的前提のあいまいさが問われ、私自身は必ずしも賛同するものではないが、ある種時代遅れのパラダイムと見なされるに至っている。

また特に、宗教学畑の宗教心理学は、心理学的方法による宗教研究を実際にはしておらず、どちらかといえば心理学者の宗教理論の紹介に終始していたため、近年では、宗教学の分野で宗教心理学者を自認する人はほとんど見られなくなった。

それよりも、心理学を近代における宗教思想的な運動としてみて、宗教と心理学の連関を思想的に解明しようとする動きが、日本でもまとまったものとして出ている。1999年に南山大学で行われた日本宗教学会では「宗教心理学と自己の問題」と題されたパネル部会が開催された。それに先立って関係者によって「宗教と心理学」メーリング・リストが立ち上げられ、私を含め、複数の宗教学者がそれに関わっている。だが、ここでは、宗教心理学が学問として堅固な基盤に立ち、今後発展してゆくという見通しを持つものは皆無といってよいだろう。メンバーである島蘭進先生と西平直先生の編著で、多くのメンバーが執筆に参加している『宗教心理の探究』(2001)では、宗教心理学に代わる言葉として「宗教心理理論」が提示されている。従来の宗教心理学は、宗教に対する心理学的アプローチとして研究されて

きたが、宗教学において展開されるべき宗教心理学とは、「宗教心理」に関する学的研究全般でありうるものであり、アプローチとしては心理学のみならず社会学や哲学、さらには教育学のアプローチをも包摂するものであるという、文字通り壮大なプランが示されている。

このような状況が宗教学において進行している中で、宗教学ではなく心理学に属する一群の研究者が、本来の意味での宗教心理学ののろしを上げたということは、宗教心理学に強い関心を抱くと同時に、宗教学としての宗教心理学の可能性をひそかに模索していた私にとっては、うれしいことであった。夏に検索サイトに登録された直後のHPを偶然見かけたときにも、そのようなうれしい驚きを覚えた。

しかし、実は手放しでは喜べない面もあった。それは、上述のような宗教学における宗教心理学をめぐる認識や、ポスト宗教心理学の動向とは、ほとんど無縁な私たちで、全く独自のものとして立ち上げがなされたということへのショックである。ほかならぬ「宗教心理学」という同一の言葉をめぐって、全く異なる二つの潮流が平行して流れていたとするならば、双方の没交渉という事態に対する責任は、双方の研究者にあると言わざるをえない。

他方、宗教学における宗教心理学の「困難な状況」という認識を、今回ワークショップの立ち上げに積極的に関わった人たちがどの程度共有しているかということ、私の印象では、ほとんど全く知らないかあるいは知っているもさほど気にしていないように思われた。もちろんこの点は誤解があるかもしれないが、そのような雰囲気を感じて懇親会の席で何人かの人に、上記のようなことを説明させていただいたことは確かである。

実は、宗教心理学の現状についての認識をめぐって、全く正反対の見方があるということ、私は事前に承知していた。最近の英語圏で出される実証的な宗教心理学関係の教科書や概説書を見ると、

むしろ宗教心理学の研究は増えていて、今や宗教心理学のリバイバルの最中だというのである。このような認識は、今回コメンテーターとして参加された金児先生の『日本人の宗教性』でも言及されている。またサーヴェイものであるが三井宏隆氏の『カルト・回心・アイデンティティの心理学』も同様の認識を示している。

しかし実体がどのようなものであるか、私はかなり懐疑的である。その実質とも言うべき先行研究のかなりの部分は、宗教社会学者や社会心理学者のカルト研究によるものである。もちろん、その他にも「宗教心理学」プロパーと呼べるさまざまな研究が為されていることは事実である。The International Journal for Psychology of Religion が10年以上も続いていることは、その具体的証左としてあげられるであろう。だが先行研究の数をあげることは容易だが、これらの研究の成果が、宗教学や心理学の主流にインパクトを与えるものになっているとは、今のところは言えないだろう。

仮に、本研究会が、「実証的」な宗教心理学者の相互参照の場として固まっていくなれば、数的蓄積は一定の期間を経てそれなりのものになるとは思われるものの、やはりマイナーな傍流として細々と続いていくだけで、外部から成果を認められずに終わる可能性は否めない。

(なお、研究会HPの趣旨説明に当初掲げられていた「実証的」という言葉に関する私の疑問 そ

れをことさらに標榜することによって、実証主義に疑問を感じているが広い意味での経験的研究には賛同する研究者を排除する印象を与えるのではないかという疑問 は、すでに本研究会のMLにて、ワークショップより前に表明され、ワークショップ当日にコメンテーターである金児先生によって支持を得られるに至り、HPの冒頭からは取り除かれたという経緯がある。)

宗教心理学という分野がはらんでいるさまざまな方法論的問題、すなわち還元主義、心理主義の一面性、歴史的特殊性などを自覚的に克服し、さらに「宗教」という対象を構築すること自体へのさまざまな批判をも念頭に置きながら、かつ、現代的意義があって、宗教学や心理学一般の研究者にもインパクトを与えるような研究テーマを掲げ、若手の研究者が精力的に業績を積み上げてゆくのであれば、日本の宗教心理学の将来は明るいといえるだろう。

しかし、そのためには、宗教学に属して「不幸」にもポスト宗教心理学の境地に達してしまった一群の研究者たちと、本研究会の発起人たちとが、有意義な交流を広げることが必須の条件となるであろう。本研究会に後から続々と入会しておりながら、MLで全く発言をしない、宗教学に属する研究者たちの気持ちを代弁するならば、いわば「不安に満ちた様子見の状態」とすることができる。そういう人たちをも巻き込めるような企画が立てられるかどうか、今後の会の発展の鍵である。

ワークショップに参加して

森 真弓(白百合女子大学)

「宗教心理学って何?」という疑問を初めて抱いた時、白百合女子大学で西脇さんとその研究に出会いました。続いてインターネット上で堀江先生の公開講義に出会い、その知識の豊富さに感嘆しつつその講義に助けられていました。ワークショップ開催の少し前には、松島さんの研究を知ることとなりました。それは、私にとってかなりの衝撃であり、その時私は自分のやっていることが「お遊びみたい

」と思いました。そう形容する以外ない程に、私は「研究すること」においてビギナーであるのだと思います。

そして、ワークショップにおいて杉山先生の研究を知って、またまた衝撃。その文献集めの丁寧さに「よく調べているなあ、研究ってこういうことなんだなあ」とため息。これまで内へ内へと向かう内省ばかりに多くの時間を費やして来た私には、「目から鱗

でした。広辞苑によると'研究'とは、「よく調べ考えて真理をきわめること」だそうです。

「きわめる」には「共有する」が含まれるのだからと教えられたのは、金児先生の言葉でした。宗教性や体験について、その立場の人々内での隠語ではなく、一般心理学の心理原理をもって説明すべきという内容のことをおっしゃっていたと思います。「現実定義との接触」とも言われました。「接触」という言葉が使われたところに、先生の研究者としての謙虚な姿勢と熱心を感じました。そのことをふまえた上で、様々な立場からの研究を広く受けとめていくとする寛容さのようなものも感じさせて頂き、嬉しく思いました。

ワークショップを通して、宗教心理学がまだまだ他の心理学領域に敷衍してっていない現状と問題点、「心理学的宗教心理学」と「宗教学的宗教心理学」との違い、実証性というもの(堀江先生いうところの「実証的研究」と「経験的研究」との違いも含め)について、教えられたこと考えさせられたことも

大きな収穫でした。(「私の研究ってお遊びみたいと思ったあの感じも、今ならもう少し別の表現が出来るかな?と思います。)

研究会に錚々たる顔ぶれが加わってくださるにつけ、ビギナーである私は何やら気後れを感じましたが、この会に参加させて頂くだけで学び取ることも多く感謝です。あえて研究会に望むことを申し述べると致しますなら、私のようなビギナーに対する寛容な視線と御指導とを今後とも宜しくお願い致します、ということでしょうか。

具体的には、事務局が提示してくれました活動方針と年間活動計画に賛同するものです。研究発表会を他の学会にも広げていくことに賛成です。研究発表会やその後の懇親会における学びや交わり、情報交換の場を是非とも持ち続けて頂きたいと願っています。また、ホームページから得られる情報(各々の研究テーマや業績)もとても有り難いと思っています。

今回の原稿におきまして、題目をつけられなかった方々につきましては、「ワークショップの感想および宗教心理学研究会への要望」との題目をつけさせていただきました。ご了承下さい。

事務局からのお知らせ

宗教心理学研究会ニューズレター第1号が無事に発行されました。今回の内容は、第1回研究発表会報告と会員の方々からの研究発表会に対する感想、研究会への要望となっております。今後、さらにニューズレターを充実したものにしていきたいと思っておりますので、ぜひ今回の感想をいただければ幸いです。

ニューズレターへの投稿も心よりお待ちしております。事務局宛てに原稿をお送りいただければ幸いです。原稿の内容は、自由です。また、第2号に向けて事務局から原稿をお願いする場合があります。そのようなときは快諾していただければ幸いです。よろしくお願い申し上げます。

始まったばかりの宗教心理学研究会ですが、年1回の研究発表会、ニューズレターの発行は研究会活動の要でありますので、継続的に進めていきたいと思っております。

これからも研究会に対する会員の皆さまからのご意見、ご感想をお待ちしております。 (K.M)

[宗教心理学研究会の今後の予定]

2004年3月

宗教心理学研究会ニュースレター第2号の編集計画を立てる(テーマを決めて原稿依頼)

2004年5月～8月

(1)ワークショップについて具体的な計画を立てる。適宜、話題提供者、指定討論者、研究会会員間の意見交換を行う

(2)宗教心理学研究会ニュースレター第2号の編集作業

2004年9月12日(日)～14日(火)

(1)日本心理学会第68回大会ワークショップ(第2回研究発表会)開催予定[開催校:関西大学]

(2)ワークショップ(研究発表会)時に、宗教心理学研究会ニュースレター第2号を発行、配付

発行: 宗教心理学研究会

編集: 宗教心理学研究会事務局

研究会事務局

担当: 松島公望[kobo@yf6.so-net.ne.jp]

研究会ホームページおよびメーリングリスト管理・運営

担当: 西脇 良[rnishiwk@nanzan-u.ac.jp]

研究会ホームページ

http://www.geocities.jp/psychology_of_religion_japan/